



Title	ドイツ語圏における新聞の前身形態について
Author(s)	江口, 豊
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 66, 59-71
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55143
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	bulletin (other)
File Information	02_EGUCHI.pdf



[Instructions for use](#)

ドイツ語圏における新聞の前身形態について

江 口 豊

0 序¹

ドイツ語圏における新聞草創期やその後のスイスにおける新聞の展開の事例などを振り返った江口(2013)を再読すると、当然大きな疑問が生まれる。近代的な意味の新聞がなぜヨーロッパで発生・確立したのであろうか。また、地上における人類の発生と同じく、それは単独の特定の場所で発生したものが拡散したのか、それとも複数の場所で自然発生的にほぼ同時発生したのか。いくつもの疑問が湧いてくるのは当然であろう。歴史的に短期間に何の前触れもなく、画期的なある現象が生じることは滅多にない。新聞のような複雑な要因を前提とする事象もその例外ではなかろう。本研究では、ドイツ語圏を中心に新聞の前身事象とでも呼ぶべきものについて、ドイツ語圏の先行研究を辿って、その複雑な全体像の輪郭を素描することとする。この場合も新聞を構成する要件をどう規定するのには無視できない。どこまでを構成要件とするかによって、「新聞の前身形態」の範囲も変異しうるからである。Kunczik/Zipfel (2005) が示すマスコミュニケーション過程の定義は、1) 圧倒的に短期的な消費(利用)に向けられた内容であること、2) 高度な技術を使用する組織形態で作成されること、3) 生産・消費のどちらの面でもいろいろな技術の助けを借りること、4) 発信者(コミュニケーター)は、匿名のままの多数の人間(分散したオーディエンス)を同時に相手にしていること、5) 公共的な性格をもち、アクセスに限定が無いこと、6) 一方向性であること(コミュニケーターとオーディエンスとは非対称関係にある)、7) コミュニケーションが間接的であること(対人コミュニケーションが直接的であると考えたとすれば)、8) 制作についてはある種の定期性が認められること、9) 継続的に提供されること、を掲げている。これらは17世紀初頭の新聞に照らしてもほぼ原則的に該当していると思なせよう。勿論、今日の状況と同じ程度にそれぞれの要件が満たされるわけでは決してない。そのいわば程度をみる尺度が客観的に立てられるのかにも配慮し

1 本研究は、科学研究費補助金「活字メディアにおける専門言語の歴史的普及の基礎研究」(課題番号23652080)の支援を受けて実施された研究成果の一部である。

つつ、日本では意外に知られていない新聞前史に関わる事実を、膨大な先行研究のごく一部から垣間見ることとする。

1 活版印刷術という技術的背景

Wilke (2008, 16) は「15世紀なかばの印刷技術の発明はマスコミュニケーションの発生にとっての決定的な前提だった」と述べ、「印刷技術により、主張が大量に、ほぼ無限定のオーディエンスに広められるようになった」と続けている。Wilke (2008, 16f.) は、印刷術の導入の意義を「手書きだったものの近代化 (Modernisierung)」、「公共コミュニケーションや職業的、個人的情報処理の機械化 (Technisierung)」という表現で説明する。挙げられている具体例を見た方がその趣旨が理解しやすいかもしれない。例えば、聖書、典礼書、ラテン語の教科書、免罪符、官庁の目録や書類にはじまり、神聖ローマ皇帝の文書や教会関係の勅書・文書 (司教選挙での争いでの)、果ては暦、辞書、判例集、様々な古典の著作類などが、以前では考えられない規模の量で印刷されるようになった。手書きではおそらく二桁の数量を複製するのが精々であったと考えられるが、三桁以上の部数を印刷できることを考えると、回覧という習慣を考慮すれば読者数はさらにその数倍以上となる。こうした印刷術の影響として、「個人による聖書の読解が省察に導くこと」や、「事務仕事の効率化」、「(文書という) 古いメディアに政治的イデオロギー上の対決で新たな効果」がもたらされた、というのが Wilke (2008, 16f.) の指摘である。

印刷術がヨーロッパに短期間に広まったことは容易に想像できる。グーテンベルクの没年である1468年の時点で、発祥に地マインツ以外にすでに9箇所の印刷所が存在した。それはドイツ語圏を中心として、バンベルク、シュトラスブール、ケルン、ローマ、バーゼル、アウクスブルクの六都市で確認され、その十年後には「たいていのヨーロッパ諸国には広まり」、「発明の半世紀後 (1495年頃) で、ヨーロッパ350都市に1,000以上の印刷所があった」Wilke (2008, 16.) というのである²。仮に15世紀末で1,000箇所最初の週間新聞が発行されるまでさらに一世紀の時間が必要であった。

ここにごく簡略に紹介した印刷術の発明・拡散は新聞成立の不可欠な一要件であるが、これ以外にも見落としがちなこととして、交通事情および郵便事情、印刷用の紙などの資材、そして読み手の問題としての識字率などもあるが、次の機会にゆずりたい。

2 1590年にイエズス会が活版印刷機を日本に持ち込み、いわゆるキリシタン版と呼ばれる印刷物を制作したが、日本最古の活版印刷とされる。

3 新聞の前身

ヨーロッパ、わけてもドイツ語圏での新聞発生の前段階で見られるコミュニケーション現象にはさまざまなものが確認されている。単純因果関係的に新聞の前身は何かという議論はあまり意味を持たないものの、具体的にどの前身形態が新聞のどの側面に繋がったのかという視点は維持する必要がある。また具体的物理的な社会現象以外にも、人々の思考の中の変化がいわば「変化の底流」を成していることも踏まえねばならないだろう。

印刷術の発明者とされるヨハネス・グーテンベルク自身の印刷によるとされる *Türkenkalender* 『トルコ人暦』も不特定の読者を対象に、比較的最近の事象（ハンガリーにおけるトルコ軍との戦闘）について論評し、主張を述べる（ヨーロッパ諸国の団結と戦意高揚）という内容から、新聞の前身形態に数えることも可能かもしれない。Wilke (2008) は、日刊新聞の前身と見せる「公共的マスメディア」として、私信と手書きニュース、一枚物印刷物・チラシ・「新しいニュース」という名前の不定期印刷物、パンフレット、見本市案内、連続ものの新聞・月報を挙げている。以下、Wilke (2008) が掲げた順に辿ってみよう。

3.1 私信 (Brief) および手書きニュース (geschriebene Zeitung)

新聞の前身形態として、私信すなわち手紙を指摘している研究者も少なくない。Wilke (2008, 18) には Steinhausen (1895) などが挙げられているが、このようにすでに100年以上前の研究者が論じている近世の私信の背景事情を、例えば Salomon (1906, 2) は次のように叙述している。

「しかし、あらゆる社会事情の解体と変革とが最初に人々の内面と外面との生活に大きな不安を呼び起こしたに違いなかった。そうなると、身の回りの制約や縛りを断ち切ろうと思う者達がお互いの間である種の連絡を作り上げようと努力するのはごく自然なことだった。文化上のプロセスがどう展開するのかについて、継続的に知らせを受け取る必要性も、考えやニュースの交換を求めさせ、そのためにもっとも手近な伝達的手段である手紙に手をのばすことになったのである。」

社会の激動期に不安を感じた個々人が同じ思想傾向にある者との連帯を確認、維持する手段として私信が重要かつ不可欠だったという理解である。一般論としてはこれに反論することは無い。ここでとくにドイツ語圏に関して想起しなければならないのは、イギリスやフランスのような統一国家ではなく、形骸化しつつあった神聖ローマ帝国という枠組みのみの小部分立状態という点であろう。独立統一国家として存立可能な程度の地理的範囲に散在した「文化的中心地間で尋常ならざる数量の私信が交わされていた」、そして、それ以上に重要だと思われるの

は、「この状況下でこうした手紙の大多数が短期間のうちにその内密性」（個人と個人とのやりとりであるという感覚）を失った」ことである、と Salomon (1906, 2f.) は説明している。「伝えた内容を即座に比較的多数の志を同じくする仲間へ届けるために、手紙の書き手はもはや半ば一人の個人に宛てるだけでなく」と説明している。

Wilke (2008, 18f.) は、手紙がニュース伝達の媒体であった点について、近世特有のものと考えず、むしろ時代を問わず手紙に書かれた最新の事件についての記述の可能性を挙げている。そして、それが歴史的に手紙の書式にも形式化されたとしている。ドイツ語圏での手紙の構成要素に Zettel などと呼ばれる部分にはいわば公的な記述が記され、本来の個人宛の記述と区分される形式が広まったという指摘である。この形式化について、Gloning (1996, 203) は三段階のプロセスを仮定している。第一段階は novitates とか novi あるいは情報源を挙げて公的な事件について述べるというもの、第二段階では、手紙のなかの主題を私的な部分と公的な部分とに分けてしまう、第三段階では手紙事態がもっぱら公的事件にのみについて成り立つというものである。

Wilke (2008, 18f.) は手紙の量的増大の原因として、商圏の拡大に起因する商業的必要性を挙げている。中世末期1400年頃のイタリア人商人 Francesco Marco Dantini については140,000通という途方もない量の手紙が現存しており、私信の部分とほぼニュースの部分とが残されていることも先行研究に基づいて触れている。こうした商人層による手紙記録の最たるものは、16世紀から17世紀にかけての Fugger-Zeitung (フッガー通信) であろう。Wilke (2008, 19) によれば、このフッガー通信は「長者 Jakob Fugger が発足させ、以後後継者達によって拡充強化されたが、…子飼いのビジネスマンたちばかりではなく、郵便局長、公務員、将校からも手紙を入手していた」ものである。しかし「フッガー通信は、ときには秘密保持のために暗号化も施された内部通信であり」、誰でもが目にするということができないという「公共性は欠けていた」。Wilke (2008, 19) は、商人層以外に活発な手紙による情報交換の例として「政治、外交、学識者、修道院」なども挙げている。結論として、情報通信手段としての手紙の最盛期を Wilke (2008, 19) は16世紀だとしてはいるものの、それ以降の印刷報道媒体の成立後もニュースソースとして利用されたことも指摘している。

Gloning (1996, 198) は定期的な通信の前身形態の起源を15世紀半ばであるという19世紀の先行研究に基づき、やはり都市や諸侯の官房や商人の私信に取り込まれていたことを述べている。Gloning (1996, 199) は、さらに15世紀の北ドイツの商人が書いた一連の手紙に含まれる言語使用の機能的側面、主題的側面については、第三者への販売などを意図していなかったにも関わらず後の手書き新聞や Neue Zeitung と類似点を示していると主張している。

こうして私信から徐々に公信の要素を増大させ、独立して手書き新聞が成立していった。Straßner (1999, 913) によれば、「1443年以降には「新情報」(Novitäten) とか「最新情報」(Novissima) などを含んだニュース書簡 (Nachrichtenbrief) や通信書簡 (Zeitungsbrief)

という概念が登場した。……1571年に最初の通信員事務所がアウクスブルクに設けられ、1615年には七カ所に増え、「本来の経済情報以外に添えられていたニュースが」「20回から25回写し書きされ、部分的には講読サークルを作っていた定期購読者に配布された」と説明されている。この情報のやりとりが政治・宗教面で重要な意味を持っていたことを表す一例として、(新教の中心地)「ヴィッテンベルクが宗教改革期に情報集散の中心地となり、フィリップ・メランヒトンが最も重要な情報発信者だった」ことも Straßner (1999, 913) は述べている。

3.2 チラシ Einblattdruck/Flugblatt あるいは(不定期)新聞 Neue Zeitungen

Wilke (2008, 19) のみならず、複数の研究者が新聞の前身形態もしくは成立要因の一つとしてあげているものに Einblattdruck (文字通りには「一枚物の印刷物」で片面のみ印刷)、Flugblatt (チラシ) あるいは Neue Zeitung (新しい知らせ) がある。共通点は、まず形態として1ページものの印刷物だということである。最も古いところでは、16世紀初期のものが確認されている。Wilke (2008, 20) の研究史上の説明にしたがえば、こうしたチラシ類については19世紀にはすでに研究対象となり、整理収集されていたものの、量的に十分なものではなく、1970年代以降の写真印刷技術などの進歩がもたらした複製の流布のお陰で科学的分析・調査による研究が拡大・深化したものである。

Wilke (2008, 20) はさらに、こうしたチラシはその紙面構成にも標準化・形式化が見られることを指摘している。すなわち、上部にタイトルとそのチラシの意図や機能にあたる表現を付している(「印刷」、「報告」、「話」、「知らせ」を例示)。さらには読者の注意を引きつける仕掛けとしての表現「驚くべき」とか「ぞっとする」などとともに、信憑性を与えようとする「本当の」なども見られるという。こうしたものの後によりやく記事本文が続くという構成である。

また、チラシに関しては制作のプロセスなどについても、「印刷業者の他にも通信員や書き手(聖職者、学者、郵便局長、都市の公務員)が文章を提供していた」(Wilke 2008, 21) ことがわかっている。さらに、Briefe/Briefmaler³ と呼ばれた専門家が「文章に合わせてイラストを制作、彩色していた」ものを、別の専門業者が木版や銅版に加工した。手間がかかるためか、こうしたイラスト類は関係のない同種の別の場所での事件のチラシにも転用されたこともあるらしい。こうして数百部作成されたチラシ類の販売形態に関しても、「即席の販売業者が通りや市場での呼びかけ、口上により販売したことがイラストにより証拠立てられている」、と Wilke (2008, 21) 述べている。Lang (2008, 117) はそれ以外にも、「商店や、田舎周りの商人による」販売にも触れていて、販売価格についても、2008年時点での2ユーロ、3ユーロ相当だとしている。

チラシ類は16世紀から17世紀にかけて相当量が印刷されたが、Lang (2008) は、16世紀と17

3 絵入りに書面・書物(祈祷書や暦など)を作成する職人のこと

世紀の200年間に刊行され、現存するもの(4,121種あるが、Neue Zeitung の名を冠したものは約半数) から独自の計算式を使って、ドイツ語圏だけでものべ16,000種類以上が実際には印刷されたものと見ている。Lang (2008) によれば、発行の総量は16世紀末の30年間ほどで、17世紀に入ると1640年代以降発行量が激減した。これは明らかに1609年以降存在が確認されている定期的発行形態をもつ新聞との競合のためと考えるのは当然のことであろう。

こうしたチラシ類の印刷発行場所としてよく知られているのは帝国自由都市⁴ と呼ばれるところで、具体的にはアウクスブルク、ニュルンベルク、プラハ、エアフルト、ストラスブール(ドイツ語読みではシュトラスブルク)、ヴィッテンベルクである(Wilke 2008, 22)。「これらの都市にはまもなく印刷所が複数設立された。また16世紀の宗教改革に与した都市ばかりでもあったが、その後判明するようにそれは偶然ではなく、宗教改革運動は誕生しつつあったマスコミュニケーションに決定的なインパクトを与えたのである。」(Wilke 2008, 23)

チラシ類の特徴として、内容上の即時性があった点と、「報告のためのメディアであり、世論形成とか評価的な意見表明のそれではない」(Wilke 2008, 23) ことが挙げられる。この点が次節で紹介するパンフレット(Flugschrift) との最大の相違であるとはされるものの、実態を分析した結果からはそれほど明白な線引きが出来ないことが分かる。ヴォルフエンビュッテルの図書館資料を調査した Pfarr (1994, 94.) によれば、確かに80%は報道テキストとすることができるが、7%には解釈やコメントが含まれている。ただし、この7%の事例は初期のものであり、チラシ類での報道テキストという図式が時代と共に固定化していったとも言えるのである。

Wilke (2008, 23) は、チラシ類の記事内容はセンセーショナルリズム色に染まっている部分もあり、「現代のイエロージャーナリズムの先駆」だとも形容している。この点は場合によっては複数のイラストによる描写とも相まって「ジャーナリズム上の暴力描写の系譜」の一部となっているとさえ続けている。ただし全体としては、センセーショナル報道は11%程度であり、政治軍事関連の報道が圧倒的に多かった(73%) ことも分かっている。また全体の三分の二が外国の事象、とくにオスマントルコを内容としていた。また、チラシ類はドイツ語圏以外でも、フランス、イギリス、オランダ、イタリアなどヨーロッパ中で確認されている(Wilke 2008, 24)。

因みに、京都大学図書館には、歴史の教科書等にも紹介されることがある天正遣欧使節に関する印刷図版が所蔵されている。これは活字部分をよく読むとここで紹介している Neue Zeitung であることがタイトルからも明らかである。ニュースとしての内容は、4人の日本人少年使節の名前を挙げて、彼らがキリスト者となり、1585年3月23日に教皇に謁見したこと、ナポリ、ベニス、ミラノを訪問し、スペイン経由で帰国の途についたこと、彼らを信仰上指導し

4 帝国自由都市 Freie- und Reichsstädte という概念は単純ではない。Isenmann (2012) は、教会権力と世俗的権力者たる王との関係を中心に帝国都市を四つの範疇に分類している。さらに狭義の帝国自由都市については「司教領だった土地で自由権などの権利・権限を獲得した都市」と規定し、ストラスブールやマイantz、ケルンをその例として挙げている。アウクスブルクは「帝国代官都市」という別の範疇に区分している。

同道した神父のこと、4人の少年の身分・出自や聡明さなどに触れている。発行地は豪商フッガー家の本拠地でもある南ドイツの都市アウクスブルク、印刷者名を Michael Manger としている。

3.3 パンフレット (Flugschrift)

Wilke (2008, 24) は、チラシとパンフレットの境界が流動的となるケースの存在も認めつつも、外的な形式と内容の二点から比較的明確な区別を立てている。チラシが「一枚印刷物」という名前が示す通り、紙一枚の片面に印刷した形式であるのに対して、パンフレットは複数枚の紙を折り込んだか、綴じたものである。

まず版型としては四つ折り版が多く、それに関連して16世紀前半では半数以上が8ページ以下の構成だったとされる (Wilke 2008, 25)。また表紙ページにはイラストが施されることも多かったが、「チラシとは違い… (記事内容を) 描写するようなものはまれで、ただ装飾として添えられていたことが多かった」らしい (Wilke 同上)。パンフレットが主張を伴うことからある意味で「偏向した」内容に合わせて「辛辣な、道徳的にも攻撃的な比喩」を表現することから風刺画の先駆と Wilke (同上) などは捉えている。

「当初散発的に発行された後に、1517年以降パンフレットは急速な興隆を経験することとなった。…… Köhler (1986) によれば1501年から1530年までの間にドイツで制作されたパンフレットは総数10,000種以上と見積もられている。」 (Wilke 2008, 25.) 「パンフレットは平均的なものでは……1,000部印刷されたが、人気のあるパンフレットではそれを遙かに超えた (マルティン・ルターの『ドイツ国民のキリスト教貴族に与う』は、1520年の数日間に4000部で品切れとなったらしい)」 (Wilke 2008, 26.)。こうした数字を組み合わせると、Wilke (同上) はパンフレットの発行総数がのべで1,000万部になると合算しているが、当時のドイツ語圏の総人口とされる1,200万人を踏まえてももちろん、今日のみからみても膨大な数と言えよう。Wilke (同上) はさらに「当時の識字率を5%未満」、「都市部では30%」として、パンフレットの読者層を想定しているが、同時に「コミュニケーションの多段階の流れのなかで……パンフレットの内容知識は識字者に限定されない」点を指摘し、パンフレットの影響の大きさを強調している。ただし、パンフレットの発行量にも盛衰があり、宗教戦争やその和議などの政治状況に発行数が左右されたことに Wilke (2008, 26.) も触れている。

チラシやこの後で紹介する見本市通信、月報新聞、それどころか新聞までも含めて常に考慮すべき事項がある。すなわち印刷事業者や発行人にとっての事業の経済性である。「パンフレットも印刷業者にとってチラシ同様の利点があった。パンフレットも少ない資金で素早く制作できた」のである (Wilke 2008, 27.) 因みに「パンフレットは行商人によって販売もされた」が、「無償で配布されることでも (プロパガンダ上の利害から) 読者の手に渡った」 (Wilke 2008, 28.)。

パンフレットの作者について、「パンフレットの多くは匿名のままに発行されたが、架空の書き手として、貧しい無学の神学の素人とされることも希ではなかった」(Wilke 同上)とされる。「1518年から1525年までに印刷されたパンフレットの最大部分はマルティン・ルター自身によるものだった」。実に1465種のパンフレットのうち、219種がルターによるとされるほどである。

こうしたパンフレットを巡る諸条件をみてくれば予見できることではあるが、その内容でもっとも多かったのが宗教上の意見・主張だった。それ以外に挙げられたものは、「政治、法律、学問、教育、社会、文化」と続く(Wilke 同上)。1500年から1530年に印刷されたパンフレットで神学上の問題を扱わなかったのは、わずか2,1%だけだった。マルティン・ルターに代表されるプロテスタント運動推進派は、この新しいメディアを積極的に活用した。印刷所のある都市の多くが新教側の領地にあったことも追い風となった。また、新しいメディアを遅まきながら旧教側も利用したが、言語の問題でさらに遅れをとることになる。つまり、カトリック側は旧来の権威の象徴であったラテン語に固執したのである。新教側は新しい言語としてのドイツ語を活用した。識字率に限らず、使用言語の問題でも市井の人々が構成する多数派を掴んだのは新教側だった。Wilke (2008, 26.) はこれを象徴する数字を挙げている。1519年から1521年までの間に刊行されたパンフの言語比率はラテン語が72%から26%に激減し、ドイツ語は28%から74%に激増しているのである。

読者を考えて作成されたパンフレットにはさまざまな工夫が施された。文章の形式を説教、書状、宗教歌、祈祷、歴史的な民謡、偽の公文書、対話形式とバリエーションに富ませたのである。

以上見てきたように、パンフレットには新聞の前身に期待される事実の報道・ニュースという側面は弱く、特定の主張を宣布する役割に重点が置かれていた。とはいえ、こうした印刷物による主張という存在が、断片的とはいえ、それまで知られることのなかった政治・外交・軍事上の報道とが受容者の頭の中で結びつくことで、いわば社会変革的・爆発的な化学変化を引き起こしたと考えることもできよう。Böning (2008, 295) にある通り、「新聞が世界に関する知識と世界の認識に役立つ専門的情報を時間経過の中で」定期的・継続的に伝えることにより、「国務や軍事を司るメカニズム」を理解させるという読者層の根本的変質を促す一方で、「普通の人間が新聞により統治者を批判することを覚えた」(Böning 2008, 297) という批判の視点の結合である。

3.4 見本市通信 (Messrelation)

1580年代から発行されたことが確認されている印刷物で、文字通り商業見本市 (Messe) が開催されたドイツの都市で見られたのが見本市通信 (Messrelation) である。Bender (1984) によれば、最古のものでは1583年にケルンで発行されたケースがあり、もはや主要な役割を果た

してはいなかったが17世紀半ばに作られたものも存在する。当時の見本市は春と秋の年に2回開催されたことから、見本市通信も年に2回発行された。つまり、開催される見本市までの半年間に起こった重要な事件などをとくに主題上の制限もなく掲載したものである。Wilke (2008, 30)はこうした点を踏まえて、公共性、定期性、題材の無限定性を満たした印刷メディア形態だと位置づけている。半年に一度という頻度が即時性を満たさないだけだという見方である。

「見本市通信は綴じられてはいない四つ折り版のノート形式の印刷冊子で、100ページほどのページ数が平均であった「が、ときにはその半分、ときにはその倍になることもあった」というのが外形上の規定である (Wilke 2008, 30)。ラテン語のタイトル (例えば *Relation historicae*) を与えられことも、ドイツ語のタイトル (Bericht「報告」、Chronik「年代記」) の場合もあった。よく知られている通り、最古の見本市通信としてはケルンで1583年に発行されたものが残されている。このラテン語タイトル *Relation historicae* を付されたケースについては、Michael von Aitzing という人物がフランクフルトの秋の見本市に合わせて制作したことも判明している。Bender (1996) の調査によれば、のべ604タイトルの見本市通信が確認されているが、なかにはいわば「続編」であったり、微妙なバリエーションを取り込んだ増刷だったり、後の時代の刷り直しなども含まれていて、批判的に捉える研究者もいる (Zwierlein 2002)。Wilke (2008, 31.) はその種のテキスト上の異動を整理して107タイトルの見本市通信を現存するものと算定していて、発行のピークを17世紀初頭と指摘している。最終的に見本市通信は18世紀まで発行され、フランクフルトで発行された1806年のものが最新とされている。見本市通信の発行地として確認されているのは、ケルン、ストラスブール、フランクフルト、エアフルト、マグデブルク、ハレ、ライプティヒ、ハイデルベルク、アシャッフエンブルクである。

Wilke は「確実な発行部数は挙げられない」とはしているが、100部から数百部と推測している。大部分の見本市通信は発行者の名前が示されている。

見本市通信の報道題材には当時の国内外の政治・軍事的なニュースが取り込まれているが、「冷静でコメント抜き、偏向的なトーンも無い」という評価である (Wilke 2008, 33.)。そして見本市通信が示したインターバルの長い定期性と即時性の欠如から、「その後の週刊新聞にとっては *Neue Zeitung* の方が近かった」のであり、「見本市通信はむしろ現代の年鑑に至る発展経路を示している」(Wilke 同上)。

3.5 シリーズもの新聞／月報 (*Serienzeitung*/*Monatszeitung*)

単発の事件・事象について報道する性格をもった *Neue Zeitung* のなかには、情報への需要に応える形で、「ある程度の定期性をともなって発行」されるものが出現し、「ときには (発行順に) 通し番号が付された」こともあるが、これを Wilke (2008, 33ff.) はシリーズもの新聞 (*Serienzeitung*) と規定している。こうした刊行物の最大の意義はその定期性にあることは言

うまでもないが、「まだその定期性は持続的に意図されたものでも、前もって定めたものでもなかった」Wilke (2008, 34.)。因みに最古のシリーズもの新聞は1566年に遡るとされる。

このシリーズもの新聞の定期性に画期的な進歩をもたらしたものが *Annus Christi* という1597年の刊行物である。Rorschacher Monatsschrift と呼ばれるこの印刷物は、1597年1月から12月までに起こった事件などを月ごとにまとめた体裁となっている。毎月の記事の量はまちまちである。現時点で入手可能なファクシミリ版では、少ない月で9ページ分、多い月では16ページのテキスト量となっている。表紙は月ごとに別に1ページを確保しているのがほとんどである(1月は表紙がない)。表紙には、出来事の起こった国の名前が羅列してある。題材はやはり、トルコ軍との戦闘、オランダの独立戦争など政治・軍事が中心である。Wilke (2008, 34.) は表紙ページの装丁、イラスト装飾、見出しに比すべき記事発信源の提示などを後の活字印刷メディアとの連続線上で注目すべきことと指摘している。

しかし、このいわば「月報新聞」については、1597年刊行の *Annus Christi* 以外に現存するものはない。唯一確認されている1597年版については6点のオリジナルが現存するが、12ヶ月すべてが揃っているのはベルン、アウクスブルク、ウィーンに所蔵されている3点のみである(Barth (1976, 7.)). 12ヶ月分が揃っていることから「月刊」形態であると解し、定期性を満たした点をとらえて、Barth (1976) などは「ドイツ語圏最初の新聞」という副題を与えているほどである。その論拠として、まずの新聞の定義を Groth⁵ にしたがって(1)定期的な刊行、(2)機械的な制作、(3)公刊物であり、だれでも読めること(公共性)、(4)多様性もしくは十全性(集合性もしくは普遍性)、(5)興味・関心の一般性、(6)即時性、(7)企業体としての制作(経済企業)を挙げ、これに照らして新聞であるという判断を下している。彼女は、即時性と題材の多様性・普遍性に基づく疑念について、16世紀末の「生活テンポ・旅行のテンポ」などの時間観念が現在よりもゆったりしたものであること、国外ニュースばかりを取り上げている点について当時の都市の規模を踏まえれば「都市内ニュース」には印刷する価値が無かったことを反論の根拠としている。これについて Wilke (2008, 34.) は、一ヶ月という時間的間隔を即時性に含めることには賛同していない。別の研究者が指摘するように、年鑑や年代記に相当するものという見方も可能かもしれない。また、Barth (1976, 30.) には、類似の印刷物としてアウクスブルクの *All Zeitung = Buch* という1590年頃の出版物についても示唆されているが、その存在は確認されていない。逆に Wilke (2008, 34.) には1566年刊行の連続もの新聞について触れられている。

この *Annus Christi 1597* にも日本に関係する記事が見受けられる。1月分の最終記事にイエズス会の聖職者達がローマに向けた日本における宣教活動についての報告が記されている。大いなる迫害にも拘わらず、日本での宣教が大きな成果を納めたこと、おびたしい数の人々、

5 Groth, O. (1948) *Die Geschichte der deutschen Zeitungswissenschaft. Probleme und Methoden*, München.

そのなかには領主も含め、キリスト教に改宗したこと、彼らが迫害されても、同じ王自身もキリスト者になるという希望をもっているという趣旨の記述である。チラシの *Neue Zeitung* だけではなく、ここにも記事となっているところから、宗教対立を背景にしてイエズス会の活動が注目と影響をもっていたことの証左であろうか⁶。

4 今後に向けて

本論で概観した事象は、遅くとも1609年にはドイツ語圏⁷の複数の都市で存在したことが確認されている週刊新聞の前身形態とされるものである。特定の個別事象が新聞の直接の前身ということとはできない。ここに挙げたひとつひとつの事象が重なって、必然的に新聞が発生した、あるいは人々が求めるメディアが生まれたと解すべきであろう。

ではなぜ民主主義の先進国であり産業革命の濫觴となったイギリス、あるいは安定した統一国家を維持・形成していたフランスなどではなく、ドイツ語圏で週刊の新聞が発案されたのか。グーテンベルクの印刷術の発明、東西南北ヨーロッパの中央に位置することで商業活動、人、物、そして情報の流れの経由地であったこと、神聖ローマ帝国という緩やかな統治体の連合であったがための意外な強制力の不徹底(検閲制度については別の機会に論じたい)、何よりも宗教改革とそれに続く宗教紛争に起因する不安定な社会状況からの情報への強烈な渴望などに原因を巡らすことはできるであろう。ストラスプールの新聞発行許可を求める *Johann Carolus* という人物の請願書が残されているが、新聞は投資に見合うだけの商機と思われたのであろうか。更に蓄積された先行研究の中に踏み込んでいく必要がある。

参考文献

- Barth, G. (1976) *Annus Christi 1597. Die Rorschacher Monatsschrift — die erste deutschsprachige Zeitung.* E. Löpfe-Benz AG, Rorschach.
- Bender, K. (1994) *Relationes Historicae.* de Gruyter, Berlin/New York.
- Bentele, G./Brosius, H.-B./Jarren, O. (2006) *Lexikon Kommunikations- und Medienwissenschaft.* VS Verlag, Wiesbaden.
- Böning, H. (2008) *Zeitung und Aufklärung.* In: Welke/Wilke(2008), S287-310.
- Esser, F. (2010) *Komparative Publizistik- und Kommunikationswissenschaft.* In: Bonfadelli et al. (hrsg.) *Einführung in die Publizistikwissenschaft.* Haupt. Verlag
- Fritz, G. (1996) *Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert.* Niemeyer, Tübingen.
- Gebhardt, H. (1999) *Forschungsgeschichte der Zeitung.* In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./ Straßner, E.

6 *Annus Christi 1597.* Nachdruck von 1977, Dr. Martin Sändig GnbH.および Barth (1976, 20.) 参照。

7 ストラスプールの勿論現状ではフランスに位置するが、アルザス地方そのものは本来ドイツ語圏に属し、アルザス方言もいわばドイツ語の一方言である。

- Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 881-892.
- Gloning, T. (1996) Zur Vorgeschichte von Darstellungsformen und Textmerkmalen der ersten Wochenzeitungen. In: Fritz, G./Straßner, E. (Hrsg.) Die Sprache der Ersten deutschen Wochenzeitungen. Niemeyer, Tübingen, S.196-258.
- Isemann, E. (2012) Die deutsche Stadt im Mittelalter 1150-1550. Böhlau, Wien/Köln/Weimar.
- Köhler (1986) Erste Schritte zu einem Meinungsprofil der frühen Reformationszeit. In: Press/Stievermann (hrsg.) Martin Luther. Probleme seiner Zeit. Stuttgart.
- Koopman, J. W. (2008) „Unverschämte und Ärgernis erregende Machrichten verboten“. Politische Einmischung in niederländischen Zeitungen. In: Welke/Wilke(2008), 123-138.
- Koszyk, K. (1999) Allgemeine Geschichte der Zeitung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 896-913.
- Kunczik, M./Zipfel, A. (2005) Publizistik. Böhlau Verlag, Köln/Weimar/Wien.
- Lang, H. W. (2008) Die Neue Zeitung des 16. und 17. Jahrhunderts. Vorläufer, Konkurrenz, Ergänzung? In: Welke, M./Wilke, J. (hrsg.): 400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext. Edition lumiér, Bremen, S.117-122.
- Salomon, L. (1906) Geschichte des deutschen Zeitungswesens. Schulzesse Hof, Oldenburg/Leipzig.
- Schmolke, M. (1997) Kommunikationsgeschichte. In: Renger/Siegert (hrsg.) Kommunikationswelten. StudienVerlag.
- Schwitalla, J. (1999) Flugschrift. Niemeyer.
- Straßner, E. (1997) Zeitung. Grundlagen der Medienkommunikation Bd. 2. Niemeyer, Tübingen.
- Straßner, E. (1999) Historische Entwicklungstendenzen der Zeitungsberichterstattung. In: Leonhard, J.-F./Ludwig, H.-W./Straßner, E. Medienwissenschaft. Ein Handbuch zur Entwicklung der Medien und Kommunikationsformen. Walter de Gruyter, Berlin/New York, 913-923.
- Wilke, J. (2008) Grundzüge der Medien- und Kommunikationsgeschichte. Böhlau Verlag, Köln/Weimar/Wien.
- Welke, M./Wilke, J. (Hrsg.) (2008) 400 Jahre Zeitung. edition lumière.
- Cornel Zwierlein, C. (2002) Rezension zu *Juliane Glöer: Meßrelationen um 1600 - ein neues Medium zwischen aktueller Presse und Geschichtsschreibung*.
(2013年10月1日取得 <http://www.sehepunkte.de/2002/02/2172.html>)

(2013年11月8日受理)

《SUMMARY》

〈research in progress〉
Historical Forerunner of the Newspaper

Yutaka EGUCHI

As is well known the weekly newspapers „Relation“ und „Aviso“ were published as far back as 1609 in Strasbourg and in Wolfenbüttel. These have been regarded as the beginning of the newspaper in modern sense i.e. a publishing medium with periodicity, universality, publicity and durability.

Much German research has described several phenomena such as “Briefe” (correspondences/letters), “Flugblatt/Einblattdruck/Neue Zeitung” (leaflet/one leaf press/news), “Flugschrift” (pamphlets), “Messrelation” (trade fair news), “Serienzeitung/Monatszeitung” (serial newspapers/monthly newspapers) as forerunners of the newspaper. To our surprise there were already two articles regarding Japan in a “Neue Zeitung” of 1585 and the “Monatszeitung” of 1597. They could be the oldest reports about Japan. The former describes the visit of Japanese delegation to Rome in the same year and the second reports about the situation of missionaries and the Christian community in Japan after the beginning of persecution.

It is further necessary to investigate social and technological conditions in the 16th and the 17th century in order to examine the emerge of newspaper: the literacy of the population, the development of paper and press, and the information and transport system.